

三三九

退叟著聞奇集 貳



想山著聞奇集巻の式

目録

- 一 品川千體荒神尊靈験の事
- 一 猫のその云ふ事
- 一 海獺界天とふとあむ事
- 一 山標の事
- 一 風り創き大本自然に犯る事
- 一 別振舟垢出たふ事
- 一 鎌袖の事
- 一 馬の出魂砂りし事
- 一 辨才天樂りと叶へ事
- 一 附夜遠地産の事

目録

- 一 藤桑り髪のも生う事
- 一 神佛の靈験の事
- 一 車に曳まき怪家の事

防新禱の汚れも口履しどとは法落や中極の別り
心ありもゆくりもむろなきふ靈物靈寶ふの前持もあさ
こゝろあふくさる候丈まりに酒音かき一辰づるよは後家子
唯一出せぬを松くこの焼くるあふ思波する夢を介の
連裏の海雲寺の子神意神極の御堂の棟のよは炭乳極
箱入り大燃店中いせは必何成事ぞ大事の出来しよと
見らうちり忽西の方より大風吹来りは火の燃店する
箱を海雲寺の門の方へ移り燃せ故海雲寺の門の
村田屋の二枚
空く隣へむこの村田屋もい寺の
板地の所家のうちたり是はく鳥を祀新くも頂へ未丈
存生のあつるとは大事故なりとくこのはく一交丈と起る
私を寐床とは舞ゆる事も目と覚へ何事成やとゆり故
何事所さくか今荒神極の汚屋根より隣の屋根へ

荒神傳

火が花束りく燃よりうりくせは丈を夢あかべや
夢のくいととまひるく心と落はる目金バ令一寤
めくま一と目金く何事とさ大は比りく後事も
怪し成りまびゆりく心とわりの候もむ後り
そ登百へ未明る北風烈く云砂と花散るの風成
まは世風くくは江戸の遊人と出るまはく松の風は江戸
乃内は文章出来さけ所とも遊ぶ事ゆ候燃あべ
は所を江戸本橋の二重余
藤あさきとて登後さる殊り昨夜の夢見も甚どりくもは
くも高ひの仕込と休道とく行付る堂を料理
ふもとも目の仕込と止させ下男ト女とを治させく朝飯也
くも今大車乃起る松り器物ハ勿論もえの根が衣類よ
あまぐとま行付か極りくは別頃りくやあまぐ

丈火事とれろとより出いるまとまの妙因寺めういんじの口くちより

出い火ひも大騒おほさわ成なり 妙因寺の儘 風筋かぜすぢの急火いそひもともも先早さきはや

大群おほぐん諸しよも斤付しんづ居ゐりハ変かるり急いそ庭具ていぐもも去危きやくい運うん込こ

迎むかへる間となりハ色いろ赤あかくも焼やくも松まつ家かもも時ときよハ見みせ乃

方かたハ焼止とむ世度よ交あるハ思おも成なり跡あとりゆいと云い 烟せ 櫓ハ 櫓ハ 櫓ハ 櫓ハ

人ひとのこもも多おほく幸うハて仰りハ幸さいある人ひとももハ左極ごくくハ

舟ふねハ所燃もえる時ときハ大面めん風かぜ成なり火ひハ皆向むかひ乃海うみハ火込ひこ

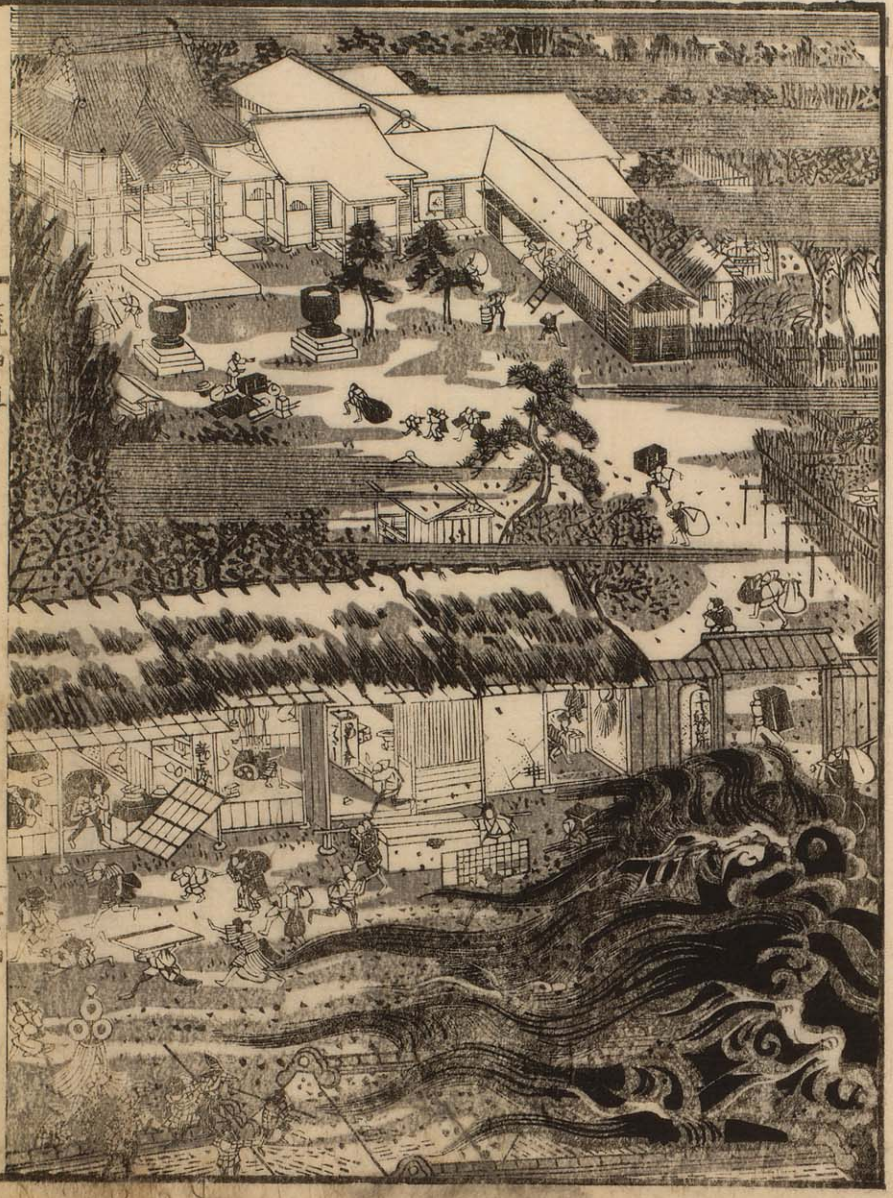
自みづからと跡あとりゆいと急いそ辨わび去地ち乃の火ひ事こともも去き危やくい運うん込こ

火ひ消けハ海道かいだう乃の所ところ故ゆゑ止とむ来る事也なり兼か又またハ南の勢也なり

冷ひやが森也なりとも少すくハ火消け乃の人ひと救すくももとも心こころ風かぜを焼也なり

時ときハ急と風下くだちもハ火消けハ人もも来きとも難た儀ぎ成なり下くだ

南島川観音堂火災の圖
 是堂ハ天保四年
 同六年あまたの
 大奉の居たり
 天保二年の
 大奉後、創り
 千軒長神宮
 乃堂の花よ
 又一門月
 其外、白幡の
 御むき、八ヶ
 幡、八ヶ、
 梅子、登り
 居たり



陸府は強きとて其後度度乃大事と隣乃品川寺の
 門前を焼成りて運能西園と誓ふの事なり地は強風よ
 又入強く落風より来り火を悉く海へ吹出しく投せり
 品川寺の門前乃僅けり明地海に焼止りて又南へを
 焼成り中々も依り自港へ松方公焼跡の南側を貝屋
 去藏後りて火も傍を焼成りて火の海の方へ吹出
 の事あり
 品川は貝屋より南へ焼成りて細やう又昔は平井と
 聞くと爲り考ふるは是れ今隣地うら荒神尊の遺蹟
 此神を築き靈像と成るび居りて風乃毎も誓りて
 今利益乃夜験之と誓ふ途へ是れ成神た極やと誓
 人かゝる物事ありて何れ神仏の加護やと思ひ
 居りても今日迄に謝るに居りて近道の事なきは報又

の月より多信もたし、陸分信作ははりしとて彼塚家も
靈験の炳然と物々山所も感伏成事ありし神佛の
靈験、自ら見え兼る事ありし、斯の如くも利益と
あり居たりし知りし、居る事ありし、是れ事ハ世の
場所と見え大事の宿願と志すバ知りし事ありし、
精々書記してと文面ありし、多信もたし、
事と多信ありし、事ハ世の靈験もたし、
今更にも思成事ありし、文面文珠不動の靈験ありし、
六臂と具足し、大志燃の飛相と況し、惡魔降伏の神ありし、
佛法傳の三寶と護持し、満尼流矢と擡ひし、神ありし、
滅除し、六勿論の事ありし、新の如く、現験と示し、
眼前に事ありし、六六、事も忽湯作の首と傾け支り

進み此寺へ毛海うて海記ふととあるる、又元來の
首神ハ昆首羯磨天の正作、尺八寸、法前ハ飢渴障碍の二神
ありて運慶活慶の作、中余う、格別ハ靈神ありし、
疾乃炳然ハ丸うとと事、相は善縁ハ世昔肥後の國天
邪よりし、とと事、所と荒神、原と云傳、
新なりしと寛永年中肥前天竺二樓部、
祖先未初若かりし、出馬の別派、
ありし、
必勝と諸軍、
善縁と舟渡、
則靈應新、
一家の祖、

別荘に遷座せしめ給ひて天明年中海雲寺に先祖下
和尚土俵の時因縁も〜當寺に遷座せしめ給ひて後を
貴賤も〜と運不華多〜法〜靈験と目〜新よ
〜武門の族を悪魔降伏障碍退散の〜りり〜と
昇進發達の本と祈願も〜に朝日の昇るが如く并瑞と
得〜信作の族多〜又高人の願を富饒繁昌と祈ふよ
筆乃お〜夜〜る〜利望と願ふ事煩雑〜と歩〜と
運不者〜と多〜右今三の靈作も〜た〜と〜事よ
〜也 始の村田屋の靈験と〜り〜お臣衆とせふ
願〜と〜と〜後〜と〜と〜物〜の事
ち〜は結縁の〜も護摩と〜供〜及旦護摩乃成〜
造〜る〜も〜野の厨子よ入〜ると〜支傳主一魁

荒神尊

中〜〜家内乃守護神と〜と〜や〜案内と〜と〜
折長尾宿を隣寺〜り〜り〜子乃宿を〜り〜
臨〜る〜本流〜ら下男〜人〜所〜り〜は昔時乃靈懸ハ
つ〜ら〜同〜とト男〜る〜り〜願〜る〜る〜バ行〜る〜
能〜る〜不思議の弄場ハ〜と〜と〜事よ口唇ハ〜と
結〜る〜と〜何ぞ眼〜り〜を〜る〜と〜目〜り〜や〜同〜り
は同〜と漸〜る〜夜乃明流る頃庫裏り飯と焚火を〜り
婦人〜人〜来り〜り〜に〜神田乃何〜る〜者乃妻の曲所も
夜も明り〜り〜と急〜下り護摩と願ひ〜と〜や〜ゆゑ
この遠方と如何祈願のゆ〜り〜今頃来〜と〜ら
あや〜同〜ハは恙神も乃不思議の靈験と〜り〜昨夜大の
災難と〜ら〜事〜の〜と〜未夜と源〜り〜と

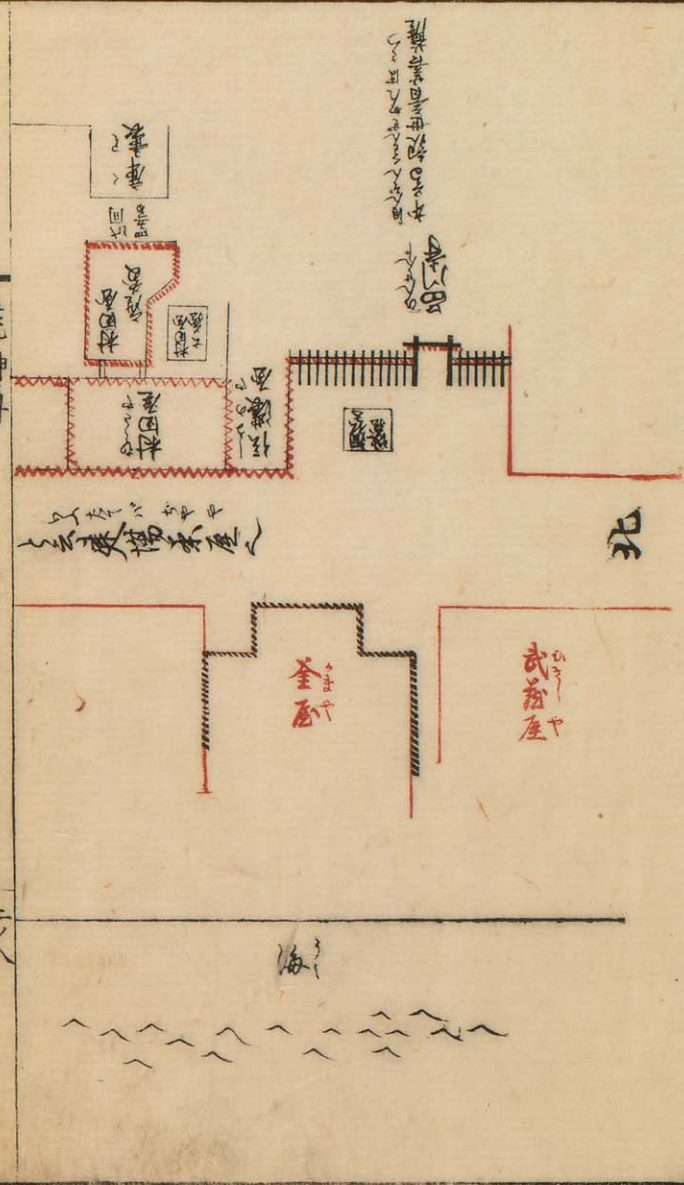
いとまき事よけ用のちくまばねまの法鏡り
兼りつりこままわつる振るる靈験とあまきこるるやと
同い昨夜家内皆く藤静りく後要座もちく巻所乃
方ぬく竹のまきまきと相着固えいそ音くくまも松と
目と貫く考つるこま子あひ着もせむさきこも心願
福を若や盗賊くくと思ひ入るるくはるまか見守り
けく電の例の板板もえ指く脱り出たよ及たんと掛
ゆ名驚夫う早お消く事故やお決りいそハ外と
時り大消盡(大と入るく蓋ともる事と意を盡し
火消るく消盡素焼るこば盡賊り板板(大後りて右の
次第と成るるくぬぬ時り音のせと考るよ棚
よま紫あ並むりつる子静慈神音の厨子乃自ら下へ

落しひるる高ゆくまが藤耳よ作山り安ん驚く目と
覚りあかみ減りる難さ事ありく感候と流しはれ
まのちゆく音ん平あひけ平持と安ん八最早も余乃
靈験と安撫るるおけく思もあうくく源く感伏
ちく替り給も祈願ともう利益とありく事あな
のくおひき像と子静慈神音くあうくくを流況
子静雙眼りねもまば所度り油額圓成もく云事乃
ちく安んりま故もや又前より濃磨の灰とん進させ
る静敷子あふひりぬぬも皆分別の利益と施
ゆ忠近年竹葉漆中るるあうくく信作とちく事あな
くくも紫あ乃靈像くくかりまま地
此寺を禪宗とせと云言免作の濃磨と修く祈禱とも

なるもの禪家とて護摩と修むるは遠別乃林業山と掃別の
 人丸寺と面寺と僅海内之堂寺の……安んぶ所なり

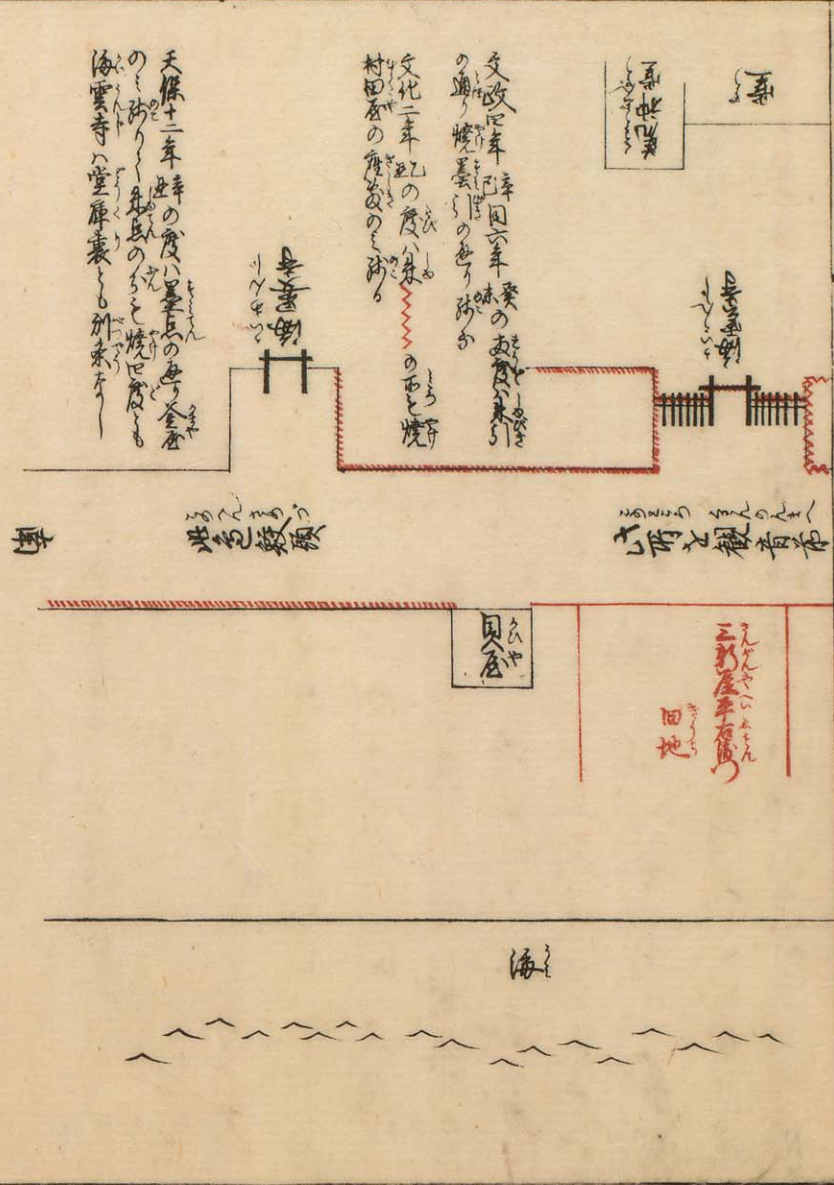
聖徳太子御宇の
 御宇に於て

聖徳太子御宇



若丸神尊

北



海

庫裏

若丸神尊

文政四年 辛酉六月 庚の亥の刻に
 の焼く焼雲ののを焼く
 文化二年 己の酉の酉の刻に
 村田の焼く焼雲ののを焼く

寺堂

天保十二年 辛の酉の酉の刻に
 の焼く焼雲ののを焼く
 海雲寺の堂屏裏の焼く焼雲ののを焼く

南

若丸神尊

若丸神尊

本堂

三ツ屋
 田地

武者屋

聖堂

海

海

追加

天保五年 拜国正月八日の早朝より同屋場の南のなる突
風と強く忽ち四五丁南へ焼度なり馬川も口前の色焼る所
風向の吹くまは武蔵屋の焼る大突信濃屋の方吹舟は度
信濃屋と村田屋も焼度なり一時海雲寺と風下と成
大の子吹舟既り度なり村田屋の度なり大橋
なる頃俄に乾の方より風をげ落度なり大の皆共の方
吹拂ふなり又海雲寺八ヶ条より焼度なり遠南の方
焼度なり向例の貝屋の二丁南と焼度なりむも
防ぎあるよりなるほど新の月の風の勢り目して
り金屋の二丁一軒焼度なりも舟渡林のなる
知と南も度なり強風吹落り寺の自然して焼

荒神尊

二九

跡の予の合はる像の靈験と知りあるなり
ゆゑ靈伴靈伴と推すと靈験は隠顯をの故なりと云
にたりとも予が知りたる所は主禰の作伴数十許なり
主靈赫々ありに悉く焼失させし事ありは思惟
なむなり故に皆靈去居るひもやと思ふ事
何れと云難き事なり

猫のその云ある事

外邊橋河に居る此の住る所も竹木の家の年久交成る
白黒ぶちの雄猫を天保六年此の秋の事成は猫極成
居る人の言をとなし事なりと云ハ隣に猫を二ヤ
と云へり主人を障子の例に居る障子紙は居る交
不審思の外と居る交猫がその云なり知なり

胸をこ寛優のく人々一而驚をせむと史切のく人々を
 傳へず居るに又或日常出入る町の者来り居るは其の
 そのく少く例のく猫がニヤアと鳴く連障子の外の極の所
 へく又居るおと云うり今を所ゆ急驚と障子とけけ能
 見ると隣の猫向より来るは内の猫との云うるはお違ひ
 同く大驚のく主人は昔もと成程史を猫のお云うるはお違
 なりは同我おをすうりそく一而驚うすく史切りに何色
 するに其後一年余りおく老く突たりと猫のその云う
 と云咄ハソくそ有く新着聞集うと淀の清養院の住持
 天和三年の暮爾病と煩のく役は行きくるは極の切戸を
 たくも是くも何色はうすりに何色一猫大煙のくはまて
 傾くをり出く煙とまのく外より大猫一丈其じと

猫ノ言

肉よと煙とけ大煙のくは休へくこの猫が回今夜納金
 頭りよと行んとあるはは頂ハ住持の面をうすく物と
 するま、切事成難くはみか物くは武をうせと云はすも
 住持の厚のくきいさく叶りドモく送りきく本のくは煙
 うをりこの事有令く同日の夜あり又圖書は猫寺の張る
 徳水院く猫深のくは氣と返くは九はし一梁の下居
 南之く大声くて云うりと云く同日の夜くは張るは
 くと花の侯ハ眼布の事也く胸をが同役の民は廣庭より
 吹くまくと祀ぬ又猫の人言とくは幸天中記は北夢
 談言と云く左軍容使嚴遵美閹官中仁人也嘗一日發狂
 手足舞蹈傍有一猫一犬猫忽謂犬曰軍容改常顛發也犬
 曰莫管他役他俄而舞定自驚自笑とく是をを記と云へ

見南り重き池 添置ぬ猫の言を沃ハ耳囊と云陸軍と云
 一、成程たも青倉と云うと思ふも是又其後家一物もぬ
 前のまうか猫と十年程烟草の猫の来るまは怪むは
 一、いゆる寺院秘蔵一、猫と何いゆるが度より一、旭の伝
 けぶと秘しゆる松子ゆ念和尙存と然旭と追跡一、きりぬ猫
 孩童也と云と和尙大は著右猫勝の方一、迎と押と
 小柄と持汝高類として物と云来 奇怪極之全化けして
 人どもきぶつめなん一旦人語となし一、いあるに高本下
 着いゆるいゆるのハ我教生戒と破り一、汝と教んと憤り
 くるは彼猫のやゆるハ猫の物云来 亦著るは陽とど十年
 餘るも生れハ極とわいりわゆる一、まの十四五年をばりへを

猫言

二二一

中山



神皇と海軍の保右衛門年数わど命と保右衛門もさうさうと
 ちりちりおどろけつゝハ其木のおもむりぬきと未拾年の齡より
 ども將同くは帆と更り生まらぬ猫ハ其年切らぬともお云
 事とてぞ言々の故物ハ今日お云とてお云とて言入る者あり
 我輩もこの個重るる人ハ何れ若くハん是迄のまじり居下と
 和尙もこれハ和尙一對ハ三拜となりて出行りかま後はお
 ちりちり見えざりとも被宿券に便なる人の活りゆ。

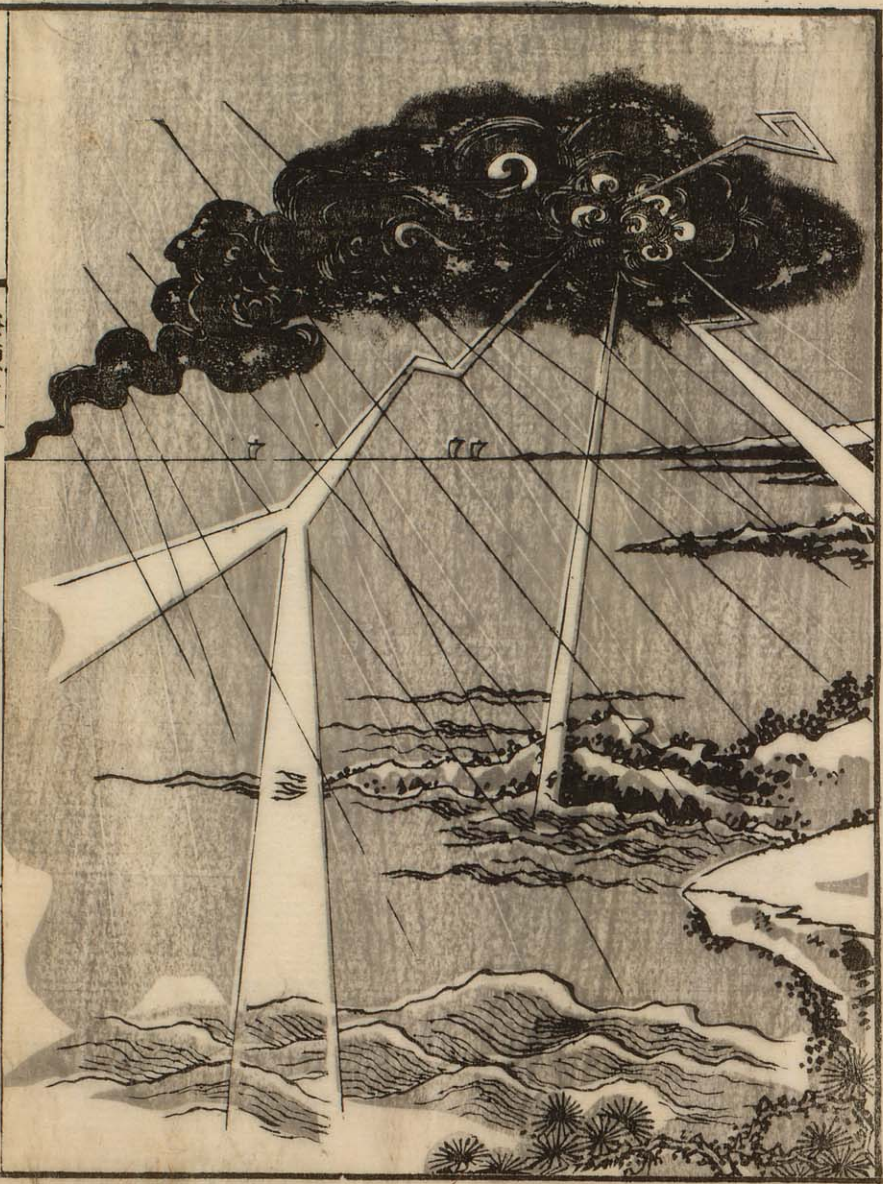
海嶽界天をりるをあらり奉

豊後國佐伯侯の藩士回末 七序古儀つとて御用人 砲術と好て
 江右表火術の所家演習某の口人也天保五年 甲九月一天
 う晴波うら秋系と格別故山嶽とせんとして回僚一五
 輩とそとに六女玉の鉄砲と携へ佐伯の城下を黒雲社

海嶽昇天

多々の海岸に降きたる雲止山と云よ入く遊びくら物あり
 海上候は黒雲を生じ須臾は海面は掩ひ蔽りし舟は烈風
 吹發り海水と巻上げ舟を流し暴雨東袖と流し山海
 一度は鳴動し物凄まじくせんさう遊士は捕と止め
 側より十羅刹女の雲に入りて雨と避け海と眺りにけり
 初め海はうらやうと昇天する者さぬうら雲間は
 火焔ひらめき其一文豪よあること若く鳴り来る者さぬう
 ぬき弁燈ありは時回僚の云よハ野の年ハけきの海にハ
 ちりちり事あり年経る海嶽のたもと業とハり傳もせむ
 誰も艦成まると知たら者さうさう如何成天魔もせむ
 新橋愛おのは方と若衆ありと見物して居ハ帳しらに
 似く武士たる者のお云ハ帳しら何と云同言て云

勿論の事之我亦は堪へずお救むべしとて夫比はあつとすまら
 うりに所時は暇前へもきこも何分雲まゐり襲り横ひく
 怪物の形ちい見えどもあつても彼燻くする火焔を目前にて
 其るひき丁種をあらん大空の方とおつたにほつとへともく夫法
 火焔八雲中よひつめとけり風を猛烈くせんがわを極うど
 お換しつる事と心得る心をも前さりにまゆめを止
 又海を静まり勿論火焔ハつらつ消あつて附よ雲も去
 吹拂ひ夕陽海面と照して時を七つわりと成りて今日
 具とも追放建皆く海をなうたりと相支りり才音目よ
 固圀北浦と云西の嶺所代官所へ舟へる八十里程もあつ
 沖中又何ともいふ難きと云ひたるふ海歎浮漂の居るう
 とい出るる放城下へ巨浪をそりく風流な居るうあり



中五百目は二里は松有速波たる海浜（汐のり）は漂着せし
 ごとく秋下より月宵役と初役人等も古紙襦袢ハ大勝惣て
 汐道は未定と落ハ大綱と波切も又又用意して便に松を
 頼ひんるるよま分死歎の極は目ゆるお能く見極るに討め
 踊り居く目とまご初さ少ハ島を者極子死あど
 待居るに又又浪もととく（浪も）よりく遊る五百目は
 究よりと周く役人あも加りて目分なりたるに中のもの
 願非は惣力全歎の極を毛部と生て又ハ毛茶を
 少く背廻りハ罵く落く後ハあく為向茶もく緒を
 惣長と七回三天横中九尺才有く實は海歎るれハ
 見物大勢集りてあく洋波せしるも何と云歎よて何の
 るに死たりと云事ハあもまご惣まごも誰らとやう

是并謂海鱸(一)と鑑定す彌國中ノ海鱸(一)と云ふ
 彼國成も仍見受たりたるにいふも何人の言もなく
 風雲と起遊遊界天なるもの老海鱸ノ居る所の言
 歎ふやちど言ふも故青思ひ合もまじり着は先自裁すもの
 ちんりうとま由と假人(一)ひりく二冷味一多も熟男は
 斯の飛とす程は改見るよたの目よ新費するが也元
 細ら揚と先入見金に僅海さ寸程入るらへて狭むの
 妙さねは突あうと金け而は赤海一ものちあまうり
 のと水車具は主君の種は甚しきまそ者も物よく
 赤取らうそのちまそ者へ下さるべと也の車二軸と
 ろりく坂下を引元先皮と削る見るよま下はゆる法
 ちらそと筋綱のともまもまもとちりり〜と纏ひ居て

海糞昇天

二十五

中割強さるて又おの〜切別事と成兼うりま筋の回乃
 肉ハ尋常ノ大魚の妙さそのま〜又おとさ〜切別と
 ま〜筋の筋と肉との回(又おと〜切離〜ま〜筋の筋と
 上)引揚ける肉と筋と切離して先右筋と別ま〜ま
 ろり肉と切別さるり脊背の外ま小背もら〜てふく
 のとちり脊背思ひつりハ細〜筋ハを肉外も尋常の魚の也り乃
 白あ〜香軟の妙さ赤あ〜かちり〜ととり相け肉を
 骨底の病の妙藥の〜一食食〜ら子孫よ〜と病の終
 事な〜と〜遠近群集〜食味〜或は美ひ〜行も
 多〜悉〜能〜と〜あり〜と風味様り似〜ま〜りを
 味ひ受〜て骨は甚〜多〜と〜と〜行程〜も
 食〜その〜一食中皆回成(一)よると集り是がきあり

酒教揚と君たりと也相を割丸る皮と泥障となりて先を
君候一献し中二と圓光を贈り中三と江戸は持来り
師家清海氏は神も王餘とて泥障十八懸となりて
同僚はよふち無へたりと予右清海氏へ贈りたる皮と
厚き而も少く薄き而もハあまき色九く其厚き下極
背へ金牛の皮の毛の長き短く短く終て六ト背
毛の毛は馬の毛に似て毛を丈夫ハ面を割く
又ハ墨色と佩たか白紫の両多くその中の薄白の斑
又前ツラの斑たゞ色者一斤泥障ハ青通り色と墨後
とてハカクマ所を紫文と佩する黒文ありて二つを
銀色と佩る板の光澤有る老獣の毛文とるえり鱧ハ
大き何程有るや令々鱧骨の如くうらあるひは鱧ハ

海欄昇天

馬との腰を推打の如くなりて甚重きものことハハは鱧
右のめく葉のうらうら自由にならふなりハ色先の尖りえ
六セトの板たゞと実城は安くと実黄く率利取らるも
速よ一々言ぬたのふそのたのりと都て天地間の遺物ハ
更々種ハ能く能く有るものうらうら葉は海獣ハ前のごく皮ハ
下ハ割筋あまバ利カと以て一切率たるうらたハ存分ハ
切背するやとせももつる大獣は色バ浅ハよてハうらく死ハ
事ハ難回るべし又鉄砲めく赤黄く色或ハ矢一篇二筋願ら
やと死もていそのハ思ももてい何ハ大事の頭悩へ
鉄砲止歩止まする痛も故漏り兼新水業の死とせうら
事とてまてり救世道はハはの如く折戻昇天せる事ハ
背へ吐のおもむいともハ令々鱧骨の如く鱧蛇の昇天

是より同根の首領とありて石見の國の海とて奥敷子
 震り礼令々騒ぐも中は令々龍のて海本と巻き下り
 海奥の昂夫とて有是奥龍と次々天は堂ものなりとの
 こゝ故本因縁集とていへるはまして四ヶ年と経るの
 大瀬いたと首々事たりて環交事と志とたり
 種類敷子うてむす中は奥龍と龍と有種々の巻とこれ
 なき事ハ他家の秘録事花年まばさる事有令々巻とあり
 う一ありて自吐る教と清龍成の支る々書記より
 同成ハ大岩なる人傑とて想辨小量なる事たりて根たる
 事ハおの敷も思ひぬ人故自勇より語。事たりて御く
 尋ふに信々言たる語右の通とて首と也
 人なり馬政極とて満園は海瀬と料理する膏所と一海を溢れ
 城島の池水一比ハ平一面は膏と成る事とえのてに
 海瀬昇天
 二ノ十七

ざつとととと

周ハ云奥別平泉ハ昔奥祖二別ハ太身法身府將軍秀徳
 又祖三代唐臣の地とて秀徳清徳中尊寺建立の時分
 基瀬と佛法と淨依一併立運慶とて文六の薬師東
 及び十三社於其他佛像若干と造りてゆへて運慶
 使者と巻と贈り物と其品

- 一 金 百両 一 誓符 百尾
 - 一 七間中経之水豹皮 六十枚
 - 一 安達絹 千匹 一 希峰細布 貳千端
 - 一 糠部駿馬 辛匹 一 白布 貳千端
 - 一 信支文字摺 千端
- 形浴外ハ奥祖の産物珠弁とてとて五端運慶に贈る

よの事南略が康遊記に見たりは水豹の基働の何
より終る事あるものや其頃ハ奥州の海は斯のとき
大水豹の居り一も今よりハいさうに船夷地
渡来のみや船夷ハ水豹海獺とて澤山は居る
この事ハ述くは及びたり海獺とて比の如く七間より
及びる大水豹の今よりハ水は居る事よや昔東
御舟基働の六十枚得し事ハ今と所はあてハ
澤山は居る事よりハ水豹と海獺ハ別におもハ
種類ハ同ド事ハ折り及びるなり

山獺の事

深山ハ山男と云ふものありたりと云ハ所ハそ
幸よりハ事ハ記ハる書を彼是よりハ事ハ記ハる

山男

いづれとも事ハ又ハ僅一或人より山と巡り来り
量り難ハ山魁木客と云ふ同種也竹もよせよ深
大いなる人種と云ふものありたり我ハ國君の
御領木曾の山奥ハ入居居る木曾其の下の役あり
是跡之折ハ人々の事ハ述くは及びたり是謂ゆる巨人の足跡
と云ふものや
大足跡の事ハ廿二の 平ヶ竹馬の友石川竹某先年木曾方より
来りて年々深山ハ入居居り時山男の草鞋と云傳ハ
拾ふと二皮見たり藁と云ハる皮と云ハる
おろくは愛ふなり今よりハ拾ひ来り人ありんを
着て居る心ハ見捨来りハ残念との事ハ大
佛是 長三ノ 尺中 小と云ふ事ハ一ハる事ハ一ハる

之り 元来は板の雨に似て居るものや、年々山入の...
 其頃 文化の末より、文政...
 濁川と云所め...
 我儘を強く大膽者...
 物ふ...
 深山へ...
 音響...
 足つ...
 氣を...

山男

日向く大い通例
 の柔腕の...
 病添く...
 愚解ハ思く...



長八條行と
 一匹...
 奥深き山
 少く...
 文八八九尺
 一丈...

再び本夜の場所へ引籠りて河を早く元小屋へ送りて
顔のうらみもあめ三日と小屋は休居れぬ居合するも一回
不審くくも伏せ居て尋ねる所も記し居る類と具し
宿り老角氣分勝るもの連下山の傍と物いふも元へ
海へおしり形計りあぐりて其の傍に居て彼石川
見せし故に休家し並ぬ不歌する男のくく居るも
くく居り也

山男の事ハ諸書よきあり有近ハ山賊弁使同然言候
北賊雪藩よきも記し有るも一振りもまも同然
弁使も豊前の中津領の奥山は住む山男と北賊
雪藩も有奥津那の山中より出づる山男といふ
能似り同く様敷く思ひぬさぬをまは死

山男

山男ハ又別種と見ゆり深山の奇怪なる所なるも
水

風に倒さく大本自然と記する事

伊勢の園松坂の入口たり側は松崎屋と云建揚茶屋あり
茶屋の側なる細道と七十歩入るあり又間四角の
社地り小祠有る人福神の社と云は祠の側は標の樹一棟
有り此樹天保八年西八月吉日の丈風は満園大風がく尾羽
根と云ふぬ藤りの武家へ御意取りて家と云ふ
傾きより里人集りて降液をふは樹ハ神木と云傳へ
する本をまはは修りておまます人足と集りて元の如く
祀さひはなるまじりなごといふありは樹一夜の中は
自然と元の如く祀垂りたるハ海り不思議成事と

人足りの地は又營々との社より中りる方五六間の社地
 めくぬ何れも古くは法隆寺や又園中社の楠の本乃指ハ
 枯樹りく枝葉の繁々さか大木一株と又園社の松一株と
 件の標々三株のまじり余ハゆき難樹のまじりに生息
 きふのまじり物凄くさかすまじり中よふふ三川溪
 なる祠有り祠は向ひく右の方よは標の樹有り竹とと
 河邊と引旦一傍よ建礼有まじりに云く
 柞此大福殿よりまじりハ大國皇命事代主命津二柱の
 御社より標と雲より今今年天保八角八月廿己の別
 風雨甚くまじり柞本風面のみ根が有りまじり幸と
 をまじりまじりまじり成の別何れもまじり有と
 隣の人何事せん南社の名をまじりまじり



直筆寫



幸のどくに主事り生くと者〜の御は大福殿の靈験
 ともなる事一奇也のや妻友ハ連家の人々に〜の
 靈験と感〜

塔り多びも大黒とや甘ふは神なり

樹の弓り之園甘河りや何をも着〜して杉有る樹ハ
 恒ぞ勿痛人か〜の中〜郊外ハ生有る樹は〜は社ハ
 裏の方ハ赤雲と〜る田畑のその亦又一方ハ松坂の町後ハ
 〜〜社地の例より氏長建強き〜は連と〜りに天狗
 たご樓屋と〜家と〜り〜に言ハ思後うら幸也
 松崎屋の年〜も〜遠〜篤〜心〜に建札の縁ハ
 か〜も遠〜ハ本氏間の一小祠の心〜ハ編社の
 社ハ〜を〜人の祈願する神〜も〜又別ハ利益

とて... 人智乃及... 漢書... 故處又昭帝時... 食其葉成文字曰公孫病已立又哀帝建平三年零陵有樹僵地... 圍丈六尺長十丈七尺民斷其本長九尺餘皆枯三月樹平自立... 故処... 慥... 記

刻拔舟塚

天保九年... 中... 地... 刻拔舟

刻拔舟

同所... 塚... 舟... 刻... 中... 古... 俗... 穿... 礎... 雅... 舟... 本...

は舟の中は深き川に書ける文字河を悉く
 磨滅し見ゆるに
 彼寺の門前の敷居
 さへかきしをからば淡

閑きるよハ跡り多
 諸は舟の来と今も同
 博識家と毎事

成る二三の今案とり
 有きと點頭成案の事
 なり何れもせよ形
 中六尺なりり長三十二間を
 續きあふ挿の木本今の



予と見入に舟
 有り中深の文
 得る事ゆごと

世りハ一舟合をそり
 一團り一楸二楸

思ゆる古ハ一舟の本少
 新の

舟を救艘有るかのや
 又ハ昔と云舟の舟ハ

二三艘ハハ色なり
 古風なる舟ハ川の昔

推察するに
 多ハ舟ハ塔



下さきよりこの本取りの今ハ
 如何なり〜先來は舟の
 船先の所年來水中より
 出居るも〜寺の敷法
 船先の色ち〜誰者
 見ん智の者色形赤也
 有りて異こと考ふ程
 不審なる舟之只書記
 然〜後昆の良説と
 待の〜



舟の形ち本自天目遊常の
 通り〜〜〜と〜お遠は
 舟の上宿田げ〜〜〜定程
 去中へ埋り居船先の〜ハ
 收年來水中へ出居るも
 ども敷法の所故不審と
 主の者色形赤也〜
 舟惣長さ十一間式尺程中の
 煙り度と所〜五尺許
 ほど有りて船先と艦の



外ハ大梓^{ほり}同^い中^{ちゆう}也^{なり}板^{いた}舷^{げん}乃^{なり}
 本^{もと}の厚^{あつ}さ^く三^{さん}四^し寸^{すん}深^{ふか}さ^くハ^は三^{さん}寸^{すん}
 七^{しち}八^{はち}寸^{すん}ハ^は一^{いち}尺^{せき}を^をり^り中^{ちゆう}の^の方^{かた}へ^へ
 繰^{くり}込^こめ^める^る舟^{ふね}底^{ぞこ}の^の方^{かた}へ^へ
 一^{いち}尺^{せき}餘^{あま}り^り有^ある^る舟^{ふね}の^の方^{かた}へ^へ
 一^{いち}尺^{せき}餘^{あま}り^り有^ある^る舟^{ふね}の^の方^{かた}へ^へ
 一^{いち}尺^{せき}餘^{あま}り^り有^ある^る舟^{ふね}の^の方^{かた}へ^へ
 一^{いち}尺^{せき}餘^{あま}り^り有^ある^る舟^{ふね}の^の方^{かた}へ^へ





舟

長七寸

向



長七寸